
スマッシュハンターブラザーズ

無幻∞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スマッシュハンターブラザーズ

【Nコード】

N2591S

【作者名】

無幻∞

【あらすじ】

亜空軍の事件から2年後マスターハンドの予言によりタブーや今までマリオ達が倒した強力な敵が復活することが分かり、任天堂オールスターズことスマッシュブラザーズをもう一度集結させ2年間乱闘やモンスター討伐の依頼をこなしながら生活をして、タブーに對抗できる力を蓄えさせるのであった

プロローグ 二度目の侵略 タブーの復活（前書き）

これはスマッシュブラザーズが城に飛ばされる前の話です

プロローグ 二度目の侵略 タブーの復活

此処は創造神マスターハンドのみが入れる謎の空間そこでマスターは予言を行っていた

マスター「この世界の壊滅・・・スマッシュブラザーズ全滅・・・
パワーアップしたタブーや敵の復活これはどういう事だ!？」

マスターは一人謎の空間で呟っていた

マスター「・・・これが本当ならスマッシュブラザーズを呼び強くしなければならぬ。そうだ、あの島に城を建てるか！」

マスターはそう言い指を鳴らす

マスター「よしこれでよし後はスマッシュブラザーズだ」

マスターは再び指を鳴らす

マスター「今度こそ奴を・・・。」

マスターはそう言い姿を消した

第1話 これから登場するキャラクター紹介（前書き）

最初に言っておきますが子供リンクとDr. マリオは登場しません

第1話 これから登場するキャラクター紹介

これから登場するキャラクターの紹介です。

マリオ

別名 Mr. nintendoの大人気キャラクターであり、この小説のリーダー的存在である。
ただ、かなりの短気だったりする。

主な戦法はファイアーボールやマントを使うなど

ルイージ

マリオの弟で影が薄く、日陰者で永遠の2番手だが実力は確かである。本気になるとかなりの力を発揮するらしい

主な戦法は基本的にマリオと同じだが所々違う

ピーチ

キノコ王国のお姫様かなりマイペースで思いもよらないハプニングを起こすこともある。

主な戦法はフライパンやテニスラケットを使い攻撃するたまにキノピオを出してガードする

キノピオ

マスターに強制的にこの世界に飛ばされてからピーチの世話役になった。ピーチにガードに使われる事がある

基本的に会話には参加しない

クッパ

マリオの宿敵でありクッパ城の主でもある。かなり頑固な性格で誘いを断ることがしばしばあるが内心メンバーと仲良くしたいと思っている。

主な戦法は炎や爪、甲羅を使い強力な一撃を放つ

ドンキーコング

ジャングルの王者。

アホな質問を良くするのでメンバーは非常に困っているが力はあるので意外に頼りにされている
バナナに目がない

主な戦法は肉弾戦で強力なパンチを放つ。

ディディーコング

ドンキーの相棒。ドンキーより知能が高い。まだ小さいので子供たちと仲良くしている。

主な戦法はピーナッツポップガンやバレルジェット、バナナの皮などをを使う

ヨッシー

ヨッシーアイランドに住んでいるドラゴン。敵を飲み込んでタマゴにする。食いしん坊なのでカービィと仲がいい

主な戦法は卵や尻尾などを使い攻撃する

ワリオ

自称マリオのライバル
とても下品で金に目がない。噂では、ゴキブリが脳内に住んでいるらしい・・・。

主な戦法はバイクで突っ込んだりタックルを使う

リンク

ハイラルの勇者とても真面目で、料理や掃除、洗濯と基本的になんでもできる。剣術に長けてるが弓、ブーメラン、爆弾などを使う

主な戦法は上記の武器や剣を使って攻撃する

よく朝早くアイク達と剣の稽古をしている。

ゼルダ

ハイラルの王女、ピーチとは違っておとなしめな性格。密かにリンクを想っているらしい。

ほとんどこちらの姿で戦闘はしないが主な戦法は魔法攻撃を巧みに使う

シーク

ゼルダのもうひとつのすがたこの時の一人称は『ボク』性格も変わる

主な戦法は体術と足の速さで敵を翻弄する

ガノンドロフ

リンクの宿敵、無愛想で余り会話には参加しない。その上この小説

の舞台である世界を本気で潰そうとしている。

主な戦法はほとんどが肉弾戦でごく稀に六賢者から奪った剣を使う

トウーンリンク

もう1人のリンク、皆からはトウーンとよばれている。子供たちと仲が良く剣の稽古もたまにするがよく寝坊してしまう。

主な戦法はリンクとほぼ一緒だが武器が少し違う

サムス

宇宙きつてのバウンティハンター（賞金稼ぎ）をやっている。一応女性でありピーチ達と仲がいい

主な戦法は遠距離からのミサイルやチャージショットでの援護

ピット

パルテナ親衛隊の隊長、基本的に真面目だがまだ幼いのでピカチュウ達とイタズラをしたりすることもある。

主な戦法はパルテナの神弓で矢を打つか短剣に分離させて剣で接近戦もできる

アイスクライマー

ポポ

相方のナナと山登りをしている。因みにナナとは友達以上恋人未満である。

ナナ

相方のポポと山登りをしている。因みに兄妹と勘違いされると怒りだす。

主な戦法は二人での息の合った木槌攻撃

ロボット

しゃべるときはいつもカタコトでメンバー達も結構聞き取りづらいらしい。最新機能が沢山ある。

主な戦法は目からビームを出したりアームや噴射口での噴射攻撃

カービィ

ププブランドに住んでいる星の戦士。食欲旺盛でヨッシーと並ぶ大食いである。人を吸い込むことで相手の能力をコピーするコピー能力をつかうことができる

主な戦法はファイターの能力をコピーしての攻撃やハンマーやカッターを使う

メタナイト

ププブランドで誘一の剣士、朝、リンク達と剣の稽古をしている。
昔、ププブランドを征服しようとしたがカービィに阻止された。

主な戦法は高速の剣さばきと空中からの奇襲

デデデ

自称ププブランドの大王。とてもワガママだがクツパ達とは違い他の人達とは仲良くしている。

主な戦法は機械仕掛けのハンマーを使う他にワドルディなどを投げたりする

キャプテン・オリマー

ホコタテ星ホコタテ運送の社員で1度遭難もしたことがあるがピクミンを指示し、危機を切り抜けた、しかし、今度は会社の借金を返すためピクミン達のいる星へ再び向かうことになった。結構苦労人である。

主な戦法はピクミンを投げたり指示して攻撃する
フォックス

若くしてスターフォックスのリーダーであり、正義感が強くパイロットとしての腕も一人前である

主な戦法はブラスタ―やリフレクター等の武器の他に体術も達者である

ファルコ

フォックスと同じくスタ―フォックスのメンバーでありかなり短気で何かあるとすぐケンカ腰になるがフォックスいわく「仲間思いのいい奴らしい」

主な戦法ほとんどフォックスと変わらないがファルコは空中戦を得意とする

ウルフ

スタ―フォックスのライバルでスタ―ウルフのリーダーでもある。とても口が悪く常にケンカ腰であるがフォックス同様パイロットとして一流である

主な戦法は鋭い爪と体術
キャプテン・ファルコン

F―Z E R O レーサでもありバウンティハンターでもある。皆からの信頼もあり、とてもやさしい性格。ただ、悪を放っておけず悪いことをしている人にファルコンパンチをするクセがある

主な戦法は体術のみの肉弾戦一筋である

ピカチュウ

世界一有名なポケモン。とても可愛らしく、愛らしいが気に食わない奴が彼に触ると雷を放たれるので注意が必要だ。

主な戦法は電撃や雷尻尾での攻撃

ポケモントレーナー

皆からはポケトレやトレーナーと呼ばれるが、本人曰く「ちゃんとした名前があるのでそっちで呼んで欲しい」とおもっている

主な戦法は彼は戦わないが三体のポケモンを指示する

ルカリオ

波導の勇者。ポケモンだがピカチュウ達と一緒に喋れる。一応皆と喋ったりするが大概山で修行している。

主な戦法は波導での攻撃己が危険になると発動する『ふくつのとうし』を武器に立ち向かう

プリン

風船ポケモン。歌が上手だがそれ（歌）を聴くと眠ってしまう。本人は相手に眠られると怒こって顔にラクガキをする。（アニメより）

主な戦法ははいたり転がったりとシンプルだが強力である

ピチュー

ピカチュウの弟でとても活発で後先考えず行動する。そのせいか、よくトラブルに巻き込まれる。

ほとんどピカチュウと変わらないがまだ電気を扱いきれないため自分も痺れてしまう

ミュウツー

無愛想で無口。ほとんどテレポートでどこかに行ってしまう。だが、テレパシーで遠くの声も聞こえるので集会などが始まるとテレポートで戻ってくるがいつも端でたたずんでいるだけである。

主な戦法はねんりきやシャドーボールを使う

マルス

アリティア王国の王子。とても勇敢で何事にも動じず常に冷静である。ただ、その冷静さが乱れると大暴れするので注意。

主な戦法は神剣ファルシオンを使った手数が多い剣技を魅せる

アイク

クリミヤ王国出身 グレイル傭兵団団長。肉が大好きで、肉に関しては、カービィやヨッシーよりも敏感であり肉と言う単語を聴くと何kmも先からソニックよりも速い速度で駆け寄ってくる。

主な戦法はラグネルを使った重い一撃を浴びさせる

ロイ

エレブ大陸のフェレ家公子怒った時、剣をめちやくちやに振り回して暴れると誰にも止められなくなる

主な戦法は封印の剣で敵を切り裂く

ネス

オネット出身の少年　P S Iをつかうことができる。子供達のリーダー核なのでイタズラをする場合全て彼が作戦を立てている。

主な戦法は超能力P S Iでの攻撃、他にバットやヨーヨーを使う

リュカ

ノーウェア島出身の少年。ネスと同じくP S Iを使える。弱虫で引っ込み思案だがネス達ということで少しずつ心を開いている

主な戦法はネスとほぼ同じだが使える技が少し違う

M r. ゲーム&ウォッチ

黒い平面の人間(?)　一見何を考えている分らない。実はミユウ

ツーでも心の中が見えないらしい。

主な戦法はフライパンから食材を出し相手にぶついたり一風変わった攻撃をする

スネーク

マリオ達とは別の世界『コナミ』からやって来た伝説の傭兵、乱闘ではどこからか武器を取りだし闘う。ダンボールをこよなく愛す。理由は不明

主な戦法は重火器や手榴弾などかなり危険なものを使って攻撃する

ソニック

マリオ達とは別の世界『セガ』からやって来た世界一速いハリネズミ。朝、誰よりも早く起きてランニングがてら10kmはしている。水が嫌い

主な戦法は自慢のスピードを使った攻撃

第1話 これから登場するキャラクター紹介（後書き）

この物語は亜空の使者の後なのでお互い顔は知っています。次から本編です

第2話 いきなり飛ばされた39人の戦士達（前書き）

再開を喜ぶ戦士達はマスターハンドの話を永遠に聞かされていた

第2話 いきなり飛ばされた39人の戦士達

マスターハンドが予言を行っていたあの時から数日後、とある野原に倒れている戦士達飛ばされたショックで気絶しているようだ。

数分後・・・

一番早く目覚めたのはマリオだった。

マリオ「うーん、此処はどこだ・・・確か俺はいつも道理ルイージと一緒に朝食を食べてたような・・・ん？」

マリオは周りを見るとかつて共に闘った仲間達が同じように倒れていた。

マリオ「とりあえず、早く皆を起こさなきゃあいけないが何でスマブラメンバーがいるんだ？」

マリオはいろいろ疑問に思いながら皆を起こしていった。

リンク「しかし、なんで俺達は此処にいるかが謎だよな。」
サムス「でも、何物かが此処に強制移動させたことは確かと思うんだが。」

一部は色々考えてたがKYなカービィは

カービィ「ねーお腹すいた。」

アイク「少し黙れ。」

カービィ「お腹すいたーお腹すいたー。」

マルス「次なんか言うて切るよ（笑顔）」

カービー「黙れナルシスト王子（怒）」

マルス「一番いわれたくないことを。（シクシク）」

マルスはナルシスト王子と言われ心底落ち込む

そう言い、此処に飛ばされた理由を言い合うものもあればお互い再開を喜ぶものもいた。

ネス「やあ、リュカ久しぶり元気だった？」

リュカ「本当に久しぶりだねネス君。僕はパパや友達と楽しくすごしてたよ。」

ネスとリュカはメンバーの中で一番仲が良く野球好きなので馬が合っているらしく、此処に飛ばされた理由など全く気にせず会話していた。

デデデ「早く城に帰りたいゾイ、帰りたいゾイ。」

デデデが子供のようにだだをこねていた。

メタナイト「陛下少し落ち着いて・・・。」

メタナイトが暴れているデデデを慌てて静める。

ルカリオ「だが、未知の場所に來たのだ。パニックにならない方が
おかしい。」

トウーン「でもさーこんなにあの時のメンバーが全員揃うってこと
は僕達を此処へよんだのってあの人しかいないんじゃないかな？」

ピカチュウ「でも、何処にもいないから気のせいじゃないピカ？」

トゥーン（うーん僕の勘は外れてないと思うんだけど・・・）

トゥーンが呟いていると

マスター「私ならずと君達の後ろにいたが？」

ふと声を聞くと後ろにはマスターハンドがいた

ヨッシー「びっくりした全然気付かなかった。」

ファルコン「俺も全く気付かなかった。」

ロイ「創造神なんだからもう少し存在感高めたら？」

マスター「・・・とにかく君達を此処に飛ばしたのは・・・。」

ロボット「ヤッパリ貴方ダッタンデスネ」

ポポ「やっぱりこんなことするのこの手袋だと思ったんだよ」

ナナ「手袋は言い過ぎだよ！！廃棄物だよ廃棄物」

あんたのほうがいどいぞ

マスター「なあ・・・そろそろ話を進めていいか？」

ゲムオ「ドウシタ焼却寸前ノ手袋」

叩かれほうだいの創造神悲しすぎる

マスター「実は2年後奴が復活すると言う予言がでたんだ」

オリマー「奴ってまさか」

マスター「そうそのまさかだタブーが復活する」

全員「えー！？」

ピット「そんな・・・僕達が死闘の末やっと倒したのに。」

ワリオ「ガハハあんな奴俺様1人で十分だ」

マスター「いや、実は奴は1人ではなく前よりさらに強力な者を味方に付けている、そして君達スマッシュブラザーズは壊滅すると予言がでたんだ。」

フォックス「じゃあ、俺達を此処に呼んだのは・・・。」

マスター「そう、君達を此処で鍛え上げる為でもあり、コミュニケーションを作るためである。」

ファルコ「おいおいちょっと待て、話はだいたいわかったが、俺のスカイクローが何処にもねーんだ。どうしてくれるんだ」

マスター「それなら心配ない、城の外れを見てくれ」

そう言うど城の外れの小さな建物を指刺す

プリン「あのなかには何があるプリ？」

マスター「あれは格納庫だフォックスのアーウィン、ファルコのカイクローやサムスのスターシップ、ファルコンのブルーファルコン、ウルフのウルフエン、オリマーのドルフィン初号機を転送して格納してある」

ウルフ「て事は俺のウルフエンもあん中に有るのか？」

マスター「そういうことだ」

マスターはいろいろな事を丁寧の説明していると

ピチュー「ねーねー次は城に入りたいでチュ。」

マスター「それについては次回説明する」

ルイージ（何言ってるんだ？この人？）

次回に続く

第2話 いきなり飛ばされた39人の戦士達（後書き）

次は城内の紹介です

第3話 ずっと聞かされる話と城内案内（前書き）

外で話を聞いていた戦士達は城の中で同じように話を聞いていた

第3話 ずっと聞かされる話と城内案内

場外で話を聞いていた戦士達は次はマスターハンドから城内の案内をされる前であった

マスター「さて、城内に入ってきたが誰かがいないとかはないか？」

アイク「おい、ミュウツーがないんだが。」

マスター「あ、アイツなら問題ないそこらへんでテレパシーで話を聞いているだろうから」

マスターが説明していると

ゼルダ「あの・・・王国の兵士達が私の事を心配しているような気がするんですが・・・」

クッパ「我輩も息子のJrが心配になってきた。」

全員（マリオファミリーは除く）「え・・・」

リンク「クツパさんて子持ちだったんですか」

クツパ「なんだ息子がいる我輩がそんなにおかしいか？」

クツパは不満そうにリンクの方を見つめる

マスター「ま・・・まあそれは置いといて、君達の故郷の大切な者にはさつき心の中で今の現状を話したところ一部納得しない者もいたがなんとか納得してくれたんだ。」

ピーチ「ほっ・・・良かった、私もキノジイが心配してると思ったから安心したわ」

ゼルダ「その気持ち分かります姫ってこういうところで不便なんですよね。」

二人は一国の王女なので何かと話が合うらしい

マスター「で・・・話を進めるが君達がいるこの場がロビーだ主に集会などをしたりするところだ。」

プリン「・・・プリー」

プリン は ロビー の 中央 を 見 な が ら う っ と り し て い る

ピカチュウ 「どうしたピカ？プリン？・・・まさか・・・歌うつもりじゃあ・・・」

プリン 「勿論プリ、こんな所で歌わない方がおかしいプリ」

そういうとプリンは中央に飛んでいき何処からかマイクを取りだし
いかにも歌いそうだった

ピチュー 「止めるでチュウ、誰でもいいからプリンを止めてー。」

ヨッシー 「いいんじゃないの？止めなくても」

デイデュー 「それになんだか面白そうだしさ」

ルカリオ (どうなっても私は知らんピカチュウかピチューが止めてくれるだろう)

こいつかなり他力本願である、こんなんで波導の勇者が勤まるのか

ピカチュウ「と・・・とにかく早くプリンを止めないと取り返しのつかないことになるピカ」

ピカチュウがプリンを止めにかかろうとしたのも時すでに遅くもう歌いだしていた

プリン「プープリンプリップー」

ルイージ「何て良い歌だ聞き入ってしまう」

ピット「でも、心なしか眠たくなってきたような・・・ZZZ」

数分後・・・

プリン「ふーすっきりした皆どうだったプリ？」

全員「ZZZ・・・」

プリン「酷いプリ、お仕置きプリ」

プリンのマイクの先端は実はキャプでそこに油性マジックを隠し持っていた

キュ　キュ　キュ

プリンは頬っぺを膨らまして皆の顔に落書きしていった

さらに数分後・・・とりあえず全員目を覚ました

ソニック「・・・ん、俺達はプリンの歌を聞いてたと思ったら意識が遠のいて・・・ん？　なんだマリオ顔に落書きなんかされちまってよ」

ソニックはマリオの顔を見るたび大笑いしていた

マリオ「笑うな笑うなお前や全員の顔に落書きされてるんだよ」

ドンキー「そんなことより当の本人は何処だ」

マリオ「そーいあ見当たらないな」

マリオが周りを見渡している、するとピカチュウが

ピカチュウ「プリンならとっくに見つけて慰めたから大丈夫だよ」

フォックス「でも、俺達が眠って落書きされてるのが腑に落ちないな」

フォックスがそう呟いていると

マスター「プリンの歌には睡眠効果があるんだ」

いきなりマスターが近くに現れ皆少し驚いている

サムス「お前いままで何処に居た？まさか、プリンの歌に催眠効果があると知ってて逃げてたんじゃないんだろうな？」

サムスはスーツの下からマスターハンドを睨み付ける

マスター「・・・そ・それより次の部屋だ、次のへやを案内するか
らついてきてくれ」

マスターハンドは焦るように近くの部屋を指さした

ロイ（この人、話そらしやがったよ）

カービィ（あのままサムスにぶちのめされたら良かったのに）

どうも皆マスターハンドを好きになれないようだ

カービィ達は心の中で口々に悪口を言いながら次の部屋に向かっていった

キッチン・食堂

ファイター達はマスターハンドに連れられ食堂に来ていた

因みにプリンに書かれた落書きは食堂に入る前に落としました

マスター「まあとりあえず此処の案内は・・・」

カービィ「やったー食堂だーお腹すいた」

ヨッシー「僕もお腹すきましたよマスターハンドさんなんか食べ物ありませんか？」

マスター「・・・お前ら話を進ませろ、まあ此処では言うまでもなく食堂だがメシは君たちにつくってもらおう」

スネーク「おいしいメシを作るのは良いが食材はあるのか？」

マスター「ああ約1ヶ月ぶんはあるが」

リンク「あの・・・マリオさんとメタナイトさんにききますがあの二人がいるから1ヶ月分の食材って・・・」

マリオ「ああ今日だけで食材が尽きるな」

メタナイト「まあカービィ達がいらなくても1週間もたないだろう」

マスター「で、食材は此処から東にある町で調達してもらう」

アイク「だが、此処は見た感じ崖に囲まれている気がするんだが」

マスター「それなら問題ない、此処の地下に地下鉄が走っていて城の外れにある階段をおりれば乗ることができる」

ネス「ねえー僕達明日野球の練習したいんだけど何処かに野球場とかないの？」

マスター「あ、言い忘れたが地下鉄で東西南北にいけるんだ、東がさっき言った町で西が球技場や動物園などの娯楽場、南が海岸で北の山に行くことが出来るんだ」

ネス「じゃあ、リュカ明日そこに行こうよカービー達も誘おうよ」

リュカ「う・・・うん、カービー達に聞いてくるよ」

もう子供達はすでに野球をすると言う予定が立っているらしい

マスター「んじゃ次の部屋に行くとするか」

マスターは次の部屋に向かっていった

風呂場

此処はロビーから左にある浴場である

マスター「此処は風呂場だ男湯と女湯があるから間違えるなよ」

ルイージ「間違えたら間違えたでかなり酷い目に合いそうだけど・・・」

ルイージの言うとおりに入った瞬間生きては帰って来れない地獄の女湯である

マスター「それと週1で掃除をしてもらうからな。まあ此処にはもう何もないから次行くぞ」

遊び部屋

此処はロビーから右にある部屋である

マスター「此処は特にないが1つ言わせてくれこの世界では君たちはゲームのキャラクターでこの部屋は君たちの主役であるゲームがあるんだ」

アイク「・・・でそんなことより隣の部屋に鍵が掛かってんだが一体何があるんだ？」

マスター「ああ、あの部屋は皆が此処の生活に慣れてきだしてからだ。」

トゥーン「でも、鍵が掛かっていると入りたくなるよね」

マスター「まあ、我慢してくれ、で2階と3階は君達の自室だあとで各々で決めといてくれ次は4階だ」

マスターは一足早く階段を上っていた

4階 乱闘部屋

マスター「此処では皆で闘いあってもらおう」

マルス「ちよとまってくてください僕達は殺し合いをしなきゃ行けないんですか」

マスター「いや、そこでは殴ったり斬ったりしてもダメージは受けないから安心しろ」

ファルコ「おいおいそんなこと可能なのかよ」

マスター「ああ勿論可能だまずあの光のでている円に入りステージやアイテムを選択する、因みにその設定はそのパソコンで設定するんだ」

ロイ「あの・・・パソコンって何ですか」

トウーン「パソコンって美味しいのかな？」

ディディー「さ・・・さあ」

マスター「ま・・・まあその事は後でパソコンを知っている者から教えてもらっていてくれ」

フォックス「それよりステージやアイテムの話はどうしたんだ？」

マスター「あ・・・それならこの紙を見てくれ」

マスターはステージやアイテムの乗っている1枚の紙を見せた

トレーナー「なんだ一個ずつ説明するんじゃないんだ」

マスター「それは作者が・・・ゲフン、これ以上はこの小説に関わ

るのでこの辺で」

デデデ「なんとも不思議な奴ゾイ」

マスター「ま・・・話はこの辺で皆で実際生活してもらおうとするか。
解散」

全員「わー」

皆は話から解放されたようにその場を離れる

マスター「あ、ちょっとまってくれ」

全員「ズルー」

全員は呼び止められスライディングしながらたおれこむ

ソニック「Why」一体何なんだよ」

マスター「後で、食事係、掃除係、調達係を決めてもらう。後、金
は一週間は貸すがその後は自力で生活してくれ」

ウルフ「おいおい、その後どうすれば良いんだよ？」

マスター「だから来週話すからさ、長くなったが話は終わりだ解散」

全員「わー」

戦士達は2年後に決戦を行うのにこの様子である

戦士達がいなくなって数分後

マスター「今はあんな感じだがきつとタブーを倒してくれるだろう」

マスターはスツと姿を消した

第3話 ずっと聞かされる話と城内案内（後書き）

次の話は説明を終えての夜の話を書くつもりです

第4話 その夜（前書き）

マスターハンドの話が終わった後の話です

第4話 その夜

長すぎるマスターハンドの話を聞き終わり、皆開放されたかのように腕を伸ばすものもいれば欠伸をしているものもいた

夕食前

大半の人達を呼んで会議していた

マリオ「んで、これからの生活皆で協力していかなきゃならないし早速当番決めるぞ。まず、調理係は俺が行く」

ルイージ「僕も調理係に回るよ兄さんただとキノコ料理ばかり作りそうだから」

マリオ「おい、ルイージ後で覚えていろよ」

マリオは物凄いオーラを放ってルイージの方を見る

ルイージ「そ・・・それより早く当番決めようよ」

マリオ「チツ・・・それより後一人ぐらい調理係がいたらいいんだ

が」

ピーチ「じゃあ私がやるわ」

マリオ&P、ルイージ「ゲッ・・・」

ピーチ「ん？どうしたのマリオ、ルイージ？」

マリオ「い・・・いや何でもありません。それより姫に家事をさせるわけにはいけないので」

マリオはとても焦って話をしている

ゼルダ（どうしたんでしょうマリオさんさつきからかなり焦ってるような）

ルイージ（実はピーチ姫の作る料理はこの世の者とは思えないほど美味しくないんだ）

ルイージはピーチに聞こえないようにゼルダに説明をする

マリオ「とにかく・・・あ、そうだ姫買い物係はどうでしょう。そ

れならゼルダ姫達と買い物しながら話とかできますし」

ピーチ「買い物係かぁ・・・良いわねそれ。それじゃあ後でゼルダと相談してくるわ」

マリオ「ほ・・・そうですか姫が気に入ってくれたなら嬉しいです」

マリオはため息をして安心しながら話す

ルイーダ「で、また振り出しに戻るけどだれか料理の出来る人はいないの？」

ルイーダがすぐにさっきの話に戻る

リンク「あの・・・俺ある程度料理出来ますが」

リンクは料理が出来ると言い手を上げる

マリオ「じゃあ皆意見とか反対はあるか？」

シーン・・・

マリオ「よしリンクに決定。よし、次掃除係出来れば5人は欲しいな」

マリオはこの当番決めが少々面倒臭くなってきたのか心なしか最初より早口になっている

オリマー「私で良ければ掃除係任さしてくれませんか？」

ルカリオ「私もやらせてもらおう（山で修行しているときは除く）」

ヨッシー「じゃあ僕もやろうかな」

ゲーム&p;ウオッチ「俺モ掃除スルゾ」

ファルコ「おいテメー雑巾とかほうきもてるのか!？」

ゲーム&p;ウオッチ「大丈夫だ問題ナイ」

トレーナー「俺もポケモン達と手伝わせて貰いますよ。な、良いよなお前達」

ゼニガメ「ゼニゼニー」

フシギソウ「フッシー」

リザードン「グォォォー」

ポケモン達は嬉しそうに鳴き声を上げる

トレーナー「と言うわけでよろしくお願いします」

マリオ「よし五人揃ったな。あ、そうそう掃除は一週間に一回ペースで宜しくな」

こうして掃除係が決まった(明らかに一人掃除が出来そうにないが・
・・)

マリオ「よし最後に皿洗いや皿並べ係だ一見地味だが結構重要な仕事だからな。まあ、これは3人いればいいか」

マリオの言う通り皿洗いはとても重要である。ずっと皿を洗わずに置いてるといくら皿があっても足りないからだ

ピカチュウ「じゃあ、僕やるピカ」

ピチュー「に・・・兄ちゃんがやるんだったら僕も」

プリン「プリンもやるプリ」

まさかのポケモン組である。手が小さいから大きな皿が持てなさそうで怖い

マリオ「子供ばっかになったかしょうがないサムス世話してやってくれ」

サムス「・・・私に命令するな」

マリオ「まあそう言うなって」

サムス「ま・・・いいだろう」

ルイージ「サムスって怖いなあ相変わらず」

マリオ「よし、当番決め終わり。今から晩飯作るから皆待っててくれ」

ネス「よし皆でゲームしようよ」

カービィ「賛成」

トウーン「よーし絶対一位になるぞー！」

ディデイー「いーや一位を取るのはオイラだ」

ポポ「最下位になった人からかわってね」

子供達は相変わらず予定を立てるのが早すぎる

マリオ「じゃあ、ポケモン組は早速宜しくな」

ピカチュウ「任せるピカよーし食堂まで競争だー」

ピカチュウは一足先に食堂に走っていった

プリン「あーまってほしいプリー」

ピチュー「兄ーちゃんもう少しゆっくりにしてほしいでチュ」

プリンとピチューもピカチュウの後を追いかけていった

マリオ「じゃあサマスも頼むよ」

サマス「だが少し待っててくれスーツが邪魔になるから部屋で脱いで来る」

マリオ「ああそうなのかじゃあ行くぞルイージ、リンク」

リンク「あ・・・はい」

ルイージ「あー僕を置いてかないで」

ルイージも後を付いていく

食堂

マリオ「さて、久しぶりに料理するからな腕がなるぜ」

リンク「カレールーとかじゃがいもがありましたよ」

リンクは巨大冷蔵庫から食材をあさっていた

マリオ「よし、カレーに決定だルイージは鍋、包丁の用意。後、リンク人参とトマト探してくれ」

ルイージ「よしやるぞ」

リンク「俺も頑張らせていただきます」

マリオ「Let's Cooking Time」

マリオは格好着けたかったのか英語で言葉を喋っていた

子供部屋

子供達はスマッシュブラザーズ64に似たゲームをプレイしていた

カービィ「クソー負けるかー」

ネス「なんのこれしき、今だスマッシュ攻撃」

トゥーン「うわーやられたストック全部無くなった最下位だー」

デイデュー「よーし空中攻撃で・・・あれ？コントロールが効かないよ？うわー落ちるー」

トゥーンとデイデューはほぼ同時にやられていた

ポポ&mp;ナナ「次僕（私）ね」

カービィ「まあ待てまず一位を決めるんだ」

ネス「いいや僕が一位を取るんだ」

リュカ「ネス頑張れー」

トレーナー「カービィも頑張れー」

ゼニガメ「ガメガー」

フシギソウ「フシフッシー」

リザードン「グウウー」

トレーナー「なんだって？ゼニガメはネスをフシギソウはカービィをリザードンはどっちも応援するのか白熱するなー」

ワイワイガヤガヤと子供の部屋でいろいろな意味で大乱闘をしていた

一方剣士5人（リンクとトゥーンは除く）は外で剣の練習をしていた

アイク「しかしまた俺達がこうして集まれるとは思わなかったな」

マルス「今思えばあの時別れを告げたのは恥ずかしいと思うよ」

アイクとマルスが話をしていると

ロイ「隙あり　タアアアー」

ロイが上空で剣を降り下ろしていた

マルス「おっと、危なかったよ」

マルスは反射的に剣を振りロイの攻撃を受け止める

ロイ「やっぱり凄い腕ですね」

メタナイト「話ている暇など与えんぞ」

ピット「まだまだ、僕も負けないよ」

ピットとメタナイトも剣を持ち3人に斬りかかる

アイク「フン デェャア」

メタナイトはアイクの攻撃をうけとめていた

メタナイト「なかなかやるのだが、甘いなデイメイションマント」

メタナイトは一瞬で姿を消した

アイク「何処だ・・・」

アイクが周りを見渡していると

メタナイト「此処だ」

メタナイトは背後に回り斬りかかって来た

アイク「くそ、カウンター」

アイクは攻撃を受け止め足でメタナイトを飛ばした

メタナイト「まだまだこれからだ」

メタナイトはアイクの元に走っていった

一方 マルス ピット ロイは

マルス「喰らえ、マーベラスコンビネーション」

マルスは素早い剣さばきでピットに斬りかかる

ピット「おっと、危ない危ない」

ピットは素早い剣さばきを間一髪で避ける

ロイ「エクスプローション」

ロイが力を溜めながら走ってくる

ロイ「そこだ」

ロイが剣を振り下ろすと大きな爆発が起こるが二人はいなかった

マルス「今だドルフィンスラッシュ」

ロイ「くそ隙を突かれた」

ロイが目をつぶると

ピット「甘いよマルスパルテナアロー」

ピットが上空から弓を放つとマルスはそれに気付き攻撃を止める

マルス「く・・・これからが勝負だ」

ピット「もちろんさまだまだ」

ロイ「僕も負ける訳にはいかないんだ」

ロイとピットは再びマルスに向かっていく

数時間後

アイク「そろそろ飯の時間だな城に戻るぞ」

マルス「そうですね、久しぶりに良い練習が出来ましたよ」

メタナイト「明日朝一でまた稽古するでしょうリンクも誘って」

ロイ「でもやっぱり稽古してて分かったんですけど僕はまだまだ未熟ですね」

アイク「大丈夫だこれから強くなっていけば良いだけだろう」

ロイが落ち込む中アイクが冷静に答える

そう言いながら五人は城に戻っていく

さらに数時間後

マリオ「よし、皆晩飯ができたぞー」

カービィ& amp; ヨッシー「待ってましたー」

マリオが言葉を発してからわずか0.5秒程度で食堂の前に走って

来ていた

カービィ「ねえご飯まだー？」

マリオ「まだだ、全員揃ってからだ」

ヨッシー「お腹空いたんで僕達だけで食べていいですか？」

マリオ「お前らに待つということとはできないのか多分あと数分で集まるから待ってろ」

数分後　取り敢えず全員が揃ったので　いただく前である

マリオ「じゃあ全員揃ったから食べるか」

全員「いただきます」

カービィ&ヨッシー「おかわりー」

フォックス「え？ちょっと待って。今いただきますって言ったばかりじゃないか」

デデデ「カービィの食欲は相変わらずゾイ」

メタナイト「陛下それはあなたですよ」

メタナイトはデデデに聞こえないようにボソツと言う

ドンキー「ヨッシーも相変わらずだなー」

ドンキーはそう言っていると

ゲーム&p;ウオッチ「……………」

ロボット「……………」

ソニック「What? どうしたんだ二人とも食欲無いのか?」

ゲーム&p;ウオッチ「イヤ、俺達作ッテモラッテ悪イガ……………」

」

ロボット「私達食べ物ヲ食べラレラレマセン」

まあそりゃそうだ平面に機械だから食べ物を食べられる訳がない

ワリオ「や・・・やべえ屁出そう」

ワリオはいかにも屁を出す体制になっていた

ルイージ「まずい、皆この部屋から出て」

ルイージが皆を部屋の外に出そうとするが時既に遅く

ワリオ「あー出るー」

ブーーーーー

物凄い威力の放屁をはなつと部屋が黄色いガスで覆われる

リュカ「う、臭いもう駄目だ」

リュカはあまりの臭さに気絶する

その後も次々と臭さのあまり倒れていく

数分後取り敢えず全員起き上がる

マリオ「くそーワリオめなんでこのタイミングで屁するんだよ」

デイディー「取り敢えずご飯食べようよ」

トウーン「うつ・・・」

ピカチュウ「どうしたピカ？」

トウーン「皆食べない方がよいよ。さっきのオナラの匂いがカレーにこびりついてるよ」

ウルフ「ちっ、あのメタボめ飯が台無しだ」

ワリオ「誰がメタボだ狼人間め」

ウルフ「てめえ俺様に喧嘩売っているのか。上等だ大乱闘で蹴りを付けてやる」

ワリオ「それはこっちのセリフだー」

二人はお互いを睨み付けながら火花を散らしていた

マリオ「おい、落ち着けワリオ此処で喧嘩は止めてくれやるんだつたら乱闘部屋でやってくれ

ウルフ「ああ分かってる今すぐ奴の息の根を止めてやる」

ルイージ「ルールは？」

ワリオ「終点でストック3アイテム無しのカチバトルだ」

ウルフ「俺様の力を見せてやる」

そう言うと二人は4階に上がっていく

ファルコ「へっ、あの馬鹿は相変わらずだな」

そう階段を上がっていくウルフを舌打ちしながら見つめる

ピーチ「まあ、ワリオも昔からあんな感じなのよね」

ピーチは二人の性格がかなり似ている少し苦笑いしながら答える

カービィ「ねーまだお腹空いてるんだけど」

ヨッシー「僕もまだまだ行けますよ」

二人はニコニコしながら机で座っていた

マリオ「しょうがないこの二人だけ飯を作り直すか」

ルイージ「えー面倒臭いな」

ルイージは誰にも聞こえないぐらい小さな声で愚痴を言いながら厨房にむかった

数十分後

3人は30人分はありそうなご飯を作り二人の前に置いた

マリオ「あー疲れた、もう勘弁してくれ」

リンク「まさか二回も連続でつくることになるとは思いませんでした」

ルイージ「僕もう部屋に戻っとくよ」

リンク「俺も明日早いで」

そう言うと二人はお互いの部屋に戻っていった

マリオ「さて、俺も部屋に戻るか」

マリオもまた二人の後を追うように部屋に戻っていった

その後は子供達のゲーム大会は深夜まで続いた

第4話 その夜（後書き）

なんとか書けましたが戦闘とかを書くのって難しいですね。
今後こんな感じのダメ作になると思いますが応援宜しくお願いします

第5話 1ヵ月後のピクニックとハプニング 前編（前書き）

ファイター達は時には楽しく時には真剣に乱闘をしていた

第5話 1ヵ月後のピクニックとハプニング 前編

メンバーは1ヶ月たって皆は楽しそうだが少し生活に飽きてきた。それを見かねたマスターはこう言ってきた

マリオ「ピクニック？こんな時にか」

ルイージ「たまに大乱闘はしているけど、まともな修行が出来てないよね」

ネス「そんな時にピクニックって、タブーを倒すために僕達を此処に飛ばしたんじゃないの？」

ネスは少し皮肉を込めて言う

トウーン「それにまだ入れない部屋があったことない？」

カービィ「ねえご飯まだあ？」

ピカチュウ「なんでカービィはいつもお腹減ってるピカ？」

カービー「さあ？僕にも分らない」

こいつはいつもマイペースである

マスター「部屋のことだが少し待ってくれ。それとピクニックを勧めるのは気分転換だ」

マルス「でも、たまにはいいんじゃないですか？」

リンク「たしかに息抜きには良いですね」

マリオ「よし、決まりだ。お言葉に甘えていかせてもらおうぜ」

マスター「あ、言い忘れたがたまに隣の島から海を渡ってモンスターが来るから戦闘準備も整えていけ」

リュカ「じゃあ、僕部屋で準備してくる」

リンク「俺も剣や盾を準備してくるか」

オリマー「わ・・・私もピクミンを」

一部の人達は準備を整えるためその場を離れた

数分後

マリオ「皆準備出来たみたいだな。いざ山にLet's go.」

マリオがそう言うのと全員が山に向かっていく

地下鉄 山方面行き電車第1車両

ルイージ「今日は珍しくガノンやクッパ、ミュウツーが付いてきてるね」

クッパ「ふん、付いてきて何が悪い。たまにの息抜きだ」

ガノン「・・・俺は貴様らが無様な格好になるのを見に来ただけだ」

ガノンは不気味に笑いながら皆の方を向く

リンク「貴様、此処に来てまだそんなこと言うか」

リンクはマスターソードを抜きガノンを睨み付ける

ガノン「ふん、俺を殺すのは勝手だが奴が一人でも欠けると世界は救えないと言っただろう」

リンク「ぐ……だがお前は这个世界を征服しようとしているんだろう」

ガノン「貴様に答える筋合いはない」

ガノンはそう言うとき空いている席に腰を掛ける

ゼルダ「リンク諦めましょう今彼を殺す訳にはいきません

リンク「ち……畜生」

リンクは悔しそうな顔をしながら剣をしまう

マリオ「ふう危なかったこんな所で戦われたら大変だったな」

マリオは安心しながら二人を見つめる

地下鉄第2車両

ネス「ピクニック楽しみだね」

カービィ「よし、弁当いっぱい食べるぞー」

ヨッシー「いやー食べるのって良いよねー」

しかし食べることに關してこの二人意気投合しすぎである

プリン「頂上に着いたらいっぱい歌いまくるプリ」

ピカチュウ「ちょ・・・歌だけは止めるピカ・・・」

ピカチュウは汗だくになりながらプリンを説得する

プリン「ちえ・・・つまらないプリ」

プリンは体(?)を下に俯けて落ち込む

リュカ「み・・・皆なんでそんなに落ち着いてるの？」

ピチュー「どうしたでチュ？リュカ」

リュカ「だ・・・だって山にはモンスターがいるかもしれないんだよ」

リュカは震えながらピチューの質問に答える

トゥーン「大丈夫だよ、僕達も一応戦えるし皆強いからね」

リュカ「そ・・・それはそうだね少し安心できたよありがとう」

トゥーン「どういたしまして」

リュカはトゥーンの言葉を聞いて安心し震えも止まる

地下鉄第3車両

この車両では山登りをする事で話が盛り上がっていた

ファルコン「俺以外には山登りするものはいないのか？」

フォックス「俺もやるぞ手加減はナシだ」

ファルコ「俺も付き合うぜリーダー」

ウルフ「俺は遠慮するぜ」

ファルコ「てめえ単に山が怖いんじゃないのか」

ウルフ「てめえ俺に喧嘩売ってるのか？オマケ野郎」

ファルコ「なんだ？てめえ調子に乗ってんじゃないのか？」

二人は火花を散らし睨め付ける

フォックス「お・・・おい喧嘩はよせ。取り敢えず二人は参加するらしいよ」

二人が火花を散らしている横でフォックスが答える

ファルコン「そうか、後でアイスクライマーの二人も誘っておくから」

ソニック「Hey俺も忘れてもらっちゃあ困るぜ」

フォックス「ああ・・・すまなかった。それより他に参加する人はいないのか？」

フォックスはそう言っていると隣の車両で話を聞いていたスネークとサムスがこちらの車両にやって来た

スネーク「話は聞いたぞ俺も参加する」

サムス「私も最近体がなまって来てるからな参加させてもらう」

二人はやる気満々でファルコン達と話す

こうして各々は山に行つたときの計画を立てていた

山　山道入り口前

地下鉄は山の麓の地下に到着し　メンバーは登山口目の前にいた

マリオ「ふーやっと着いたぜ。正直電車の中は暇でしようがないんだよな」

どうやらマリオは暇なのは好きではないらしい

カービィ「それよりさ早く山登ろうよ」

ネス「珍しいねカービィが乗り気なのは」

カービィ「だって早く登らないと弁当が腐っちゃうじゃん」

トウーン「な・・・なるほど」

トウーンはカービィの発言に苦笑いする

カービィ「よし、僕が一番に頂上に登って弁当を食べるぞ」

カービィはそう言うのと真っ先に山を登っていく
因みに弁当を持っているのはカービィである

ヨッシー「うわーカービィに弁当全部取られる」

ヨッシーも負けじとカービィを追いかける

デイデュー「オイラ達も追いかけようよ」

リュカ「う・・・うん」

ピカチュウ「しょうがないピカ」

トレーナー「よし行こう」

子供達はカービィとヨッシーの後を追いかける

アイク「・・・行っちゃまったな」

マリオ「よし俺達も後を追いかけるぞ」

マリオを先頭に山に登っていく

山 山頂

マリオ達は子供達の後を追いかけて全員山頂にやってきていた

カービィ「ハア ハアやっと付いたよーし弁当は僕のものだ」

カービィは頭に乗せていた弁当を食べようとするが

カービィ「あれ？弁当がない。どうしよう道におとしちゃたかな？
これじゃあ皆に怒らえる」

カービィは弁当を探すために山を降りていった

その頃マリオ達は体力が切れて休んでいる子供達を見つけて合流していた

マリオ「しかしカービィは一体何処まで行ったんだ」

ルイージ「もう大分上まで行ってるんじゃない？」

ピーチ「私もうヘトヘトよ」

ピーチは汗をかきながら近くの切り株に座る

ゼルダ「大丈夫？ピーチ」

ピーチ「え・・・ええ、なんとか」

ゼルダ「もう少しで頂上だと思うから頑張って」

ピーチ「ありがとうゼルダ」

ピーチはゼルダの言葉を聞いた後ゆっくり立ち上がる

オリマー「あれピクミン達がない」

オリマーはさっきまでいたピクミン達を探している

ドンキー「お、あんなところにいるぞ」

ドンキーの指差す先にピクミン達がいた

ロボット「アレ何カ持ッテイマスネ」

ロボットの言うとおり5匹のピクミンはなにかを持っていた

ロイ「これってカービィが持っていた弁当ですよ」

メタナイト「しかしなぜ弁当がこんな所に」

リンク「きつと慌ててたから弁当を落としていったんでしょう」

マリオ「どちらにせよ弁当が見つかったよ」

オリマー「じゃあこのままピクミン達に頂上まで運んでもらいます」

マリオ「ああ、頼んだぞ」

オリマー「あ、はい分かりました」

オリマーはピクミン達に指示をだし弁当を運ばせる

カービィ「あれ、此処にもないよ」

ロイ「カービィ、どうして此処に？」

カービィ「いやー弁当落としちゃて皆知らない？」

カービィはそう言いながら辺りを見渡す

ピチュー「もうみつけてるでチュ」

カービィ「あ……本当だ……ごめん」

カービィは地面に体を当て土下座する

ルカリオ「気にするな、それより早く頂上に行くぞ」

カービィ「うん、ありがとう皆。よし今度こそ僕が一番乗りだ」

カービィは謝り、反省した瞬間走り出す

全員「待てー貴様ー」

全員走り出したカービィを追いかけていく

山 山頂

全員はさつきカービーがいた山頂付近に付いて弁当を食べ終わってのその後の自由時間である

フォックスチーム

フォックス達7名+さつき誘ってなかったポポとナナの8名
ポポとナナはアイスクライマーとして
で山頂の少し下の崖付近に来ていた

フォックス「よし、此処なら面白そうな勝負が出来そうだ」

ファルコ「で、一番早くあのでっぺんに登りゃあ価値なんだな」

スネーク「ところで誰がスタートを言うんだ」

ファルコン「よし、俺が言おう」

ファルコンはそう言うと言手を挙げる

サムス「・・・ズルはするなよ」

ファルコン「ああ、分かっている。それ以前にあいつらみたいにセコいこととして何になる」

まあ、言われなくともあいつらってのは検討が付く

とある場所

クッパ「グシユン・・・誰が噂でもしてるのか」

ワリオ「グシュン、グシュン畜生鼻水が止まらねえ花粉症か？」

こいつは相変わらず馬鹿である

ガノン（・・・ちっ、誰が噂でもしているのか？もし本当にそうだったらそいつをブチのめすべきだな）

こいつは相変わらずの殺気だ・・・

話を戻そう

ファルコン「よしスタート5秒前、4、3、2、1、スタート」

ファルコンの合図と共に全員が崖を登っていく。スタートダッシュはほぼ互角である

ナナ「やっぱり皆すごいね」

ポポ「僕達も本気だそう。ナナ、ロープを受け取って」

ポポは片手でロープを持ちながらも片方の手でナナにロープを投げつける

ポポ「ナナ準備できた？」

ナナ「いつでもいいよ」

ポポ「じゃあ行くよゴムジャンプ」

ポポはナナがロープを体に縛り付けたのを確認して高くに放り投げる

ナナ「行くよポポ」

ポポ「お願い」

ナナはポポと同じように高くに放り投げる

ソニック「Whatさすがだな、俺も負けねーぜ。スプリングジャンプ」

ソニックは何処からかスプリングを取りだし大ジャンプをする

スネーク「チィ・・・ハリネズミまでもか俺もだサイファー」

スネークは飛行型偵察カメラを使いどんどん上昇する

ファルコ「チィ・・・アーウィンさえあれば」

もはや山登りではないようなことをしようとしているファルコだがもう半分ぐらいの者ルール無視している

ファルコン「まだまだだー!!」

ファルコンはルール無視をしている者をすごいスピードで抜いていく。さすが漢^{おとし}である

サムス「私達も負けてられないぞ」

サムスはファルコンに続きものすごいスピードで登っていく

フォックス「行くぞファルコ」

フォックスも負けじと登っていく、その後ろからスタフォ組二人も追いかける

数十分後

全員がほぼ同時に崖を登って頂上で汗だくでへばっていた

ファルコン「ハアハア疲れた」

スネーク「少し此処で休んだら皆のいた場所に戻ろう」

ポポ「うん、そうしよう僕もう死にそう」

こうして山登りチームは一時間ほど休んで山頂に戻っていた

第5話 1ヵ月後のピクニックとハプニング 前編（後書き）

いろいろと書き忘れましたが、オリマーがピクミンを連れているのはマスターがオニオンをドルフィン初号機等と一緒に転送しています。次々話からモンハン要素を取り入れるので感想らんに小説に入れて欲しいモンスターをご記入ください（できれば2ndGでお願いします）

第6話 1ヶ月後のピクニックとハプニング 後編（前書き）

今回もかなりダグダですがご了承ください

第6話 1ヶ月後のピクニックとハプニング 後編

マリオチーム

マリオ ドンキー ヨッシー ゼルダ マルス ゲーム&ウォッチ
トレイナー ピット リュカ デデデ プリン トウーンの12
人は麓の森で今日の晩ご飯のためキノコや山菜を集めていた

山 麓の森

マリオ「やっと着いた、さてとキノコを探すか。皆、キノコを見つけたら俺に持ってこい」

マリオはいつになく真剣な顔をしていた。真剣になりすぎて顔が気色悪い

ドンキー「やっぱり二年たっても全く性格が変わってないな」

ドンキーはマリオの性格が全然変わってないことに苦笑いする

ヨッシー「そりゃあそうだよ。マリオはキノコ王国1のキノコマニアだから」

さすがヨッシー長年マリオの相棒として活躍しているだけある

マルス「でも、探すと言っても場所が分からないんじゃないじゃあ探すにも探せないんじゃないじゃあ・・・」

マリオ「大丈夫だ、大体キノコは木の根元とかに生えているからな」

トレーナー「そうなんですか、よし、リュカ行こう」

リュカ「うん、分かった」

リュカは元気良く返事をする。トレーナーは3匹のポケモンをボールから出して森の奥に入っていく。恐らくポケモン達にも探してもらうのだろう。

トウーン「僕たちも行こう」

プリン（切り株があったらその上で歌いたいプリ）

トウーン「どうしたのプリン？」

プリン「な・・・何でもないプリ」

プリンは少し動揺しながらトウーンの方を向く

プリン「それより早く山菜を探しに行こうプリ」

トウーン「よし、行こう」

トウーンはプリンと共にリュカとトレーナーの向かっていた方とは違う方向の森に入っていく

ピット「やっぱり僕も行く」

ピットはそう言うのとトレーナー達の方に走っていく

ゲーム&ウォッチ「俺モトウーン達に着イテイクヨ」

ゲーム&ウォッチはピットと同じくトウーン達を追いかけていく

ゼルダ「子供達先にいっちゃいましたね」

マリオ「まあ、いいじゃないか、そのうち帰ってくるだろうし」

デデデ「およ、此処にキノコがあるゾイ。これは食べれるゾイ？」

デデデは自分の見つけたキノコに指差しマリオに聞く

マリオ「どれどれ・・・ん！？これは毒だ」

ゼルダ「す・・・すごい少し見ただけで毒かどうか分かるなんて」

ドンキー「さすがマリオだな」

マリオ「いや、それほどもねーよ。それよりさっきもいったが今の様なことがあるからな注意してくれ」

そう言いマリオもキノコさがしを行う

数時間 マリオ達の持ってきたカゴがいっぱいになるほどキノコや
山菜を集めていた

因みに リュカ達の集めたキノコはほとんどが毒なく食べられる物
だった

マリオ「そろそろ日が沈む山頂で皆と合流しよう」

トゥーン「今日は楽しかったよね」

トレーナー（こっちはリザードンの尻尾が木に燃え移るのを恐れな
がら森を歩かなければいかなかったけど）

あんたポケモントレーナーなんだからそういう状況ならボールに戻
しておけよ

そう各々が話ながら森を抜けていった

川の上流

ルイージチーム

ルイージ リンク カービィ ピカチュウ ネス ピーチ ロイ
ピチュー アイク デイディー メタナイト オリマー ロボット
の13人一応マリオチームと同じぐらいの人数

このチームもマリオチーム同様食料確保だがこちらは魚釣りだ

ルイージ 「よし釣るぞ」

アイク 「だが俺は釣りなんてしたことないぞ」

じゃあこっちのチームに来んなよ

ルイージ「後で僕が釣りを知らない人におしえるから安心してよ」

ピーチ「私もやってもいいかしら？」

ルイージ「もちろんですよ。ただドレスは濡らしたりしないでください。兄さんに怒らせるのは僕なんですから」

ピーチ「ありがとうございます、じゃあ行きましょう」

ピーチは少し上流にピカチュウ達を連れていき釣りを始める

ロイ「行っちゃいましたね」

アイク「もしかして一緒に行きたかったんじゃないのか？」

ロイ「な・・・なんでそうなるんですか？」

ロイはアイクの発言に内心焦る

アイク「いやロイは俺達より若いから、そういう甘えとかが出たのかと思ってな」

ロイ「冗談はよしてください」

アイク「すまないそれより早くやり方教えてもらわないと釣り出来なくなるぞ」

ロイ「あ、本当だルイージさーんもう一度教えてください」

ルイージ「しょうがないな・・・」

ルイージは若干面倒臭そうにフアイアーエンブレムFE組+メタナイトにもう一度説明を
しなおす

一方 釣りを知っていたリンクとオリマーと何故かロボットは先に
釣りしていた

リンク「しかし何故ロボットさんは釣りを出来るのですか」

リンクは少し疑問を持ちながらロボットに問う

ロボット「ナゼカッテ、ソレハ私ニモ分カリマセン」

オリマー「きつと製作者がロボットさんの人工頭脳に釣りの仕方に
プログラムを仕込んだんでしょう」

リンク「人工頭脳だのプログラムだのなんなんですか？」

そういう機械的な物のないリンクの世界、オリマーが何をいつてるのかさっぱりだった

ロボット「ヘクター博士トベクター博士ハ釣ヲ知ツテタンデショウカ」

ロボットは自分を作った人に付いて考え込む

オリマー「あ、ロボットさんの釣竿引いてますよ。リンクさんのも引いてますよ」

リンク「あ、本当だ早く釣らなきゃいけませんね」

ロボット「ウググ・・・！絶対ニ釣ッテヤル」

リンクは立ち上がり釣竿を必死に引きロボットは両手で力強く釣竿を引く

オリマー「うお・・・私の竿にも来た」

オリマーは話している最中に竿に魚が掛かったので慌てて竿を持つ

ルイージ「ふう・・・やっと説明が終わったよ。あ・・・もしかして掛かってる!？」

ルイージは若干急ぎ気味でリンクの竿を持ち手伝う

ルイージ「三人は二人（正確には一人と一機）を手伝って」

メタナイト「よし、分かった今行くぞ。私はロボットの方に行く、二人はオリマーの方に」

メタナイトはそう言うのとロボットの方向に走っていく

アイク「俺達も行くぞ」

ロイ「はい」

二人もオリマーの元に行く

数分後

なんとか魚を釣り上げた　かなりの大物だ

リンク「ふう、どうにか釣れましたね」

メタナイト「しかし、こんな小さな川にこんな大物がいるとは」

メタナイトは予想以上の大きさの魚に驚く

ロボット「シカシカナリ時間ガカカリマシタネ。モウ夕方デスヨ」

ロボットの言うとおり日が沈みかけていた

オリマー「では、ピカチュウさん達を呼んできますね」

オリマーはピカチュウ達を呼びに走っていく

アイク「だが、少し嫌な予感がするんだが」

アイクはこんな冗談半分で言ってるがその言葉が現実となる

マルス「あれ？向こうで何か光ってますよ」

メタナイト「ま・・・まさか、皆急いで川から離れるんだ」

メタナイトは急いで川を離れるよう指示するがもう遅く

バリバリバリバリ

全員「ギャー」

そう、それはピカチュウとピチューの電撃だった川の水でさらに威力があがっていた

数秒後 全員目を覚ましていたがロボットだけはピクリとも動かなかった

オリマー「皆さん大丈夫ですか？」

どうやらオリマーがピカチュウ達を連れてきた

ピカチュウ「皆、ごめんピカ」

ピチュー「ピチューも謝るチュウ」

ピカチュウとピチューはかなり反省しているらしい

ロイ「僕達は大丈夫ですけどロボットさんが電気を出しながら全然動きません」

リンク「オリマーさん何か分かりませんか？」

オリマー「恐らくロボットさんはさっきの電撃でショートしたんでしょう」

カービー「ショートって何？ロボット壊れたの？」

カービーは何がなんだか分からない状況に陥っている

ネス「ねえロボットって壊れたの？直せないの？」

ネスもパニックになっている

オリマー「皆落ち着いて出来るかどうか分かりませんが修理してみます」

オリマーはそう言うとは処からか修理道具を出しロボットを修理し始める

数十分後

オリマー「よし出来たぞ。ピカチュウさん、そのスイッチを押してください」

オリマーはピカチュウの方を見ながらロボットに付いているスイッチを指差す

ピカチュウ「分かったピカ、押すよ」

ポチ

ピカチュウがスイッチを押すとロボットが目を明け立ち上がる

ロボット「アレ、私ハ一体」

ロボットはいまの状況を把握できず困惑している

ピチュー「実は・・・」

ピチュー「言うわけでチュウ」

ロボット「ソウデシタカ皆サンスイマセンデシタ

ロボットは申し訳無さそうに謝る

ピカチュウ&ピチューもほぼどうじに謝る

ディディー「ほ・・・良かったロボットが直って。あ、早くマリオ達と合流しないと」

ディディーは夕方と言うことを思いだし急いで走り出す

リンク「あ、そうでした皆さん早く」

リンク達は山頂に向けて走っていく

山頂

ルイーージ達は何とか時間内に間に合い全員で山を降りていた

因みにクッパ、ワリオ、ミュウツー、ガノンは山頂待機をしており。
ルカリオは近くで修行をしていた

マリオ「ふう・・・後は城に帰るだけだ」

ネス「だけどは帰るまでが遠足って言うし油断出来ないと思うよ」

ミュウツー「……………」

ルカリオ「どうしたんだ？」

ミュウツー「……後ろにいるぞマスターハンドがいったやつが」

ミュウツーが指差すと背後に巨大なモンスターがいた

容姿は赤い鱗に赤い翼に強靱な尻尾を持った青い目の巨大なモンスターだ

リュカ「うわ……なんだあれ」

リュカはあまりの威圧感に泣きそうになる

??? 「グオオオオオ」

謎のモンスターはファイター達を見つけると雄叫びを挙げる

マリオ「くそ、こいつのことだったのか。皆、急げこの橋を渡って逃げるんだ」

マリオを先頭に全員が橋を渡って行く

全員が渡りきったと思ったがたった一匹逃げ切れていなかった

ピチューだ・・・

どうやらモンスターの威圧に恐れ足が動かなくなっているのだろう

ピチュー「こ・怖いでチュー。兄ちゃん助けて」

ピチューはモンスターの足元で怯えて踞っている

ピカチュウ「ピチュー今助けに行くピカ」

ピカチュウは弟を助けるためにモンスターに勇敢に突っ込んでいくが・・・

??? 「グオオオー」

モンスターはピチューに気付いて無いらしく翼を羽ばたかせ飛んでいく

ピチュー「ピチューー」

ピチューは風に飛ばされ橋の下の谷に落ちていく

ピカチュウ「ピカ?ピカー」

ピカチュウはピチューが落ちていくのを発見しすぐさまその後を追う

しかし、約1km先に滝があるのを知っていたメンバーは焦っていた

トレーナー「くそ、下が川だからリザードンに行かせるわけには行かないし」

トレーナーはリザードンの入ったモンスターボールを持ったまま困惑する

ピット「僕が行くよ」

マリオ「待て君は確か飛べなかったんだろう」

マリオは慌ててピットを静止する

ピット「馬鹿にしないでよ2年間天空界で飛ぶ練習をしてきたんだから」

ピットは自信満々で言う

ピット「それじゃ行ってくるよ」

ピットはそう言うと言へと飛び降りていく

谷底 滝付近

ピットは低空を飛行しながら速いスピードで飛んでいた

ピット「もうすぐ2匹が見えてくるはず・・・ん？」

ピットが目を凝らして見てみると2匹は気を失いながら滝壺に落ちているのが見えた

ピット「まずい、急がないと」

ピットはさらにスピードを上げて飛び滝を降りていく

しかし、いくら飛ぶ練習をしても飛べない天使であるピット。女神
パルテナの力が無ければ飛べて五分だ

ピット（翼がもう限界だ・・・持ってくれよ）

ピットはもう限界らしく少しずつ飛ぶスピードが落ちていく

ガシッ

ピットは何とか2匹を助け近くの地面に着地した

ピット「さて、2匹が起きてからマリオさん達と合流するか・・・」

その後、2匹は目覚めピットと共に皆と合流し城に帰った

城　ロビー

マリオ達は城に帰りマスターハンドに今日あった事を説明した

マリオ「と、言うわけだ」

マスター「なるほど、そいつは恐らくリオレウスだ」

リュカ「リ……リオレウス？さっきの奴の事？」

マスター「ああ、そうだよつは別名 空の王者とよばれていて、お前達が今日行った山も実は奴のテリトリーなんだ」

マスターがそう言った直後全員が睨み付ける

マスター「ま、待て幾ら私でも分かることと分からないことがあるんだよ。それに、朝にも警告してただろう」

マスターは若干焦りながら弁解する

トゥーン「それより、あの扉はいつ開くの」

トゥーンは未だに閉ざされている扉を指差す

マスター「ああ、遂にあの扉を開けることになるな」

マスターはゆっくり扉に近付き指を鳴らすと掛かっていた鍵が外れ

中に入れるようになる

マスター「さあ、入ってくれ」

他の者達もマスターの後に続き部屋に入っていく

依頼部屋

メタナイト「此処はどういう部屋なんだ？」

マスター「此処は依頼部屋だ」

ファルコン「依頼部屋？誰から依頼を受けるんだ？」

マスター「町に行った者なら知っていると思うがそこには君達を知らない（実際に言っているとゲームのマリオ達を知らない）人間がいるんだ」

ピーチ「へえ……でも、なんで私達に？」

ピーチは呑気に質問をする

マスター「それはもちろん君達を鍛えるためだ」

ドンキー「で、何を依頼されるんだ？」

マスター「島の住民の代わりに素材を集める採集クエスト、大量発生して迷惑をしているモンスターを倒す討伐クエスト、巨大なモンスターに立ち向かう狩猟クエストが主だな」

ポポ「じゃあ、狩猟クエストだと僕達が出会ったような奴と戦わなければならぬの？」

マスター「そういうことだ。あ、忘れてたこれを受け取ってくれ」

マスターは指を鳴らすと地図のようなものが何枚も現れた

マスター「これは、君達が依頼をこなす主な場所だ」

ルイージ「雪山に砂漠、森丘いろいろな場所があるね」

ルイージはあまりのフィールドの多さに啞然とする

ナナ「うう・・・火山なんて行ったら焼け死んじゃうよ」

マリオ「クッパいつも俺に溶岩に落とされてるからお前は熱いのにな慣れてるよな？」

クッパ「フ・・・フン余計なお世話だ」

クッパは皮肉っぽい言葉にシラを付くが若干焦る

マスター「まあ・・皆言いたいことはあるだろうが今は話を進めるぞ。まず、チーム分けだ私が3チームに分けた」

そう言うメンバーは3チームに分けられていく

数分後

チーム分けが完了した、こんな感じである

第一班 マリオ ドンキー リンク サムス ヨッシー カービィ
フォックス ピカチュウ ルイージ フォックス ネス プリン
計12名

第二班 ピーチ クッパ ゼルダ アイスクライマー マルス フアルコ
ガノン ゲーム&ウォッチ ロイ ピチュー ミュウツ

ー 計12名（ポポとナナを別にして）

第三班 メタナイト ピット デイディー アイク リュカ デデ
デオリマー トレーナー ロボット ルカリオ トウーン ウル
フワリオ スネーク ソニック 計15名

第三班が多すぎるが大丈夫だろう

で、気付いた人はいると思うが第一班は初代スマブラメンバー 第二班はDXから登場したメンバー 第三班はXから登場したメンバーである

マスター「なんとかメンバー決めが終わった」

アイク「だが何処か適当じゃないか？」

マスター「ま、気にするな」

カービー「ねえ、お腹すいた。早くご飯食べよう」

マスター「そうだな、話すことは話たしな。あ、最後に一つ隣の島に行くには南の海岸から船に乗ってくれ」

マリオ「よし、話終わったな。早く晩飯作らないと約数名暴れだすからな」

ルイージ「そうだね、早く作ろう」

マリオ達調理係はすぐに厨房に向かう、その後を追うように全員が厨房に入る

マスター「……………」

マスターは無言で姿を消した

第6話 1ヶ月後のピクニックとハプニング 後編（後書き）

次回からモンスターハンターの要素を入れていきます。お楽しみに

第7話 雪山でのクエストVS雪山の狩人とまさかの？（前書き）

いよいよ今回から本格的に動きます

第7話 雪山でのクエストVS雪山の狩人とまさかの？

深夜

第一班の初めてのクエストは雪山でなんと夜中だった第一班はかなり不満そうに他の者を起こさぬよう準備していた

マリオ「たくっ、夜に出発するなんて聞いてないぞ」

ドンキー「ぐう・・・ぐう・・・ハッ」

ドンキーは半分起きて半分寝てる状態である

リンク「皆さん、居ますか？」

ルイージ「あれ、カービィとピカチュウが居ない」

ヨッシー「僕が起こしてくるよ」

ヨッシーはそう言うのと階段を上がっていき数分後二人を背中に乗せて階段を降りて来た

カービィ「ぐう・ぐう・ぐう・zzz」

ピカチュウ「ピイカ・ピイカ・zzz」

マリオ「駄目だこりや完全に熟睡してやがる」

ネス「向こうに着いてから起こしたらいいんじゃない」

ファルコン「ま、そうだな今すぐに起こす必要も無いしな」

マリオ「じゃ、ヨッシー少しの間頼むぞ」

ヨッシー「任せといてよ」

マリオ「じゃ、まあ行くとしますか。」

マリオ達は城の外に出ていこうとするが

マスター「ちょっと待て」

全員「ズル」

全員勢い良く倒れこむ

ルイージ「いきなりなんだよ」

マスター「いや、君達に渡したいものがあってな」

ネス「渡したいもの？」

マスター「ああ、これだ」

マスターバンドが指を鳴らすと温かそうな液体の入った瓶が何本も出てくる

リンク「これは何なんですか？」

マスター「これはホットドリンクだ。これを飲むと少しの間寒さに強くなる飲み物だ。君達はこれから雪山に向かうのだから何も無いと凍え死ぬだろう」

マリオ「ありがたいなマスター。じゃ、行ってくるよ」

マスター「ああ、気付けな」

マスターは扉の前でマリオ達を見送る

数時間後

マリオ達は海岸から船に乗り途中でカービィ達が目を覚ましたので
マスターからもらったホットドリンクについての説明をした

そして遂に依頼場所である雪山の麓に着いた（エリア1付近）

マリオ「ふいーやっと着いたな」

マリオは大きく欠伸をしながら船から降りて来た

サムス「だが、本当に大変なのは此処からだろ？」

サムスの言う通り今からかなり高いところまで登らなければならない

カービィ「ねえ、あれ飲まなくて良いの？」

カービィの言うあれとはホットドリンクの事だ

マリオ「あ、そうだすっかり忘れてた」

マリオはすっかり忘れてたらしく懷から12本の瓶を取り出した

リンク「これを飲んだだけで温かくなるとは不思議ですね」

ルイージ「あまりそう言うのは気にしない方が良いよ。考えるだけ無駄だし」

リンクに対する質問に素早く答えたルイージ

マリオ「早く登るぞ俺は早く帰って寝たいんだ」

マリオはいつの間にかドリンクを飲み終わり少し先で皆を呼んでいた

ネス「うわ、早くしないと置いてかれるよ」

ネスはそう言う走りながらドリンクを飲み始める

その後を他のメンバーも追い掛ける

雪山 中腹（エリア5）

メンバーは氷柱などが沢山ある洞窟を進んでいた

フォックス「洞窟に入って随分たつがまだ抜けられないのか？」

プリン「プリ・・・もう限界プリ」

日頃から余り運動をしてなかったプリン冷たい地面に座り込む

リンク「少し休憩しましょう。まだ、時間も有りますし」

リンクも近くの岩場に座り込む

他のメンバーも地面に座り込み休憩する

数分後

全員体力が回復し再び進み始める

雪山 洞窟外（エリア6）

何とか洞窟を抜けたメンバー辺り一面雪が積もりさっきの場所よりかなり冷えていた

ピカチュウ「やっと外に出れたピカ。プリン大丈夫？」

ピカチュウは少し疲れているプリンを気遣う

プリン「大丈夫プリ。もう少し頑張るプリ」

マリオ「で？依頼書に描いてあったモンスターはこの辺りにいるはずだが？」

マリオは目的のモンスターを探すため辺りを見渡す

ネス「あ、向こうになんかいるよ」

ネスは何処かに走って行くモンスターを指差す

後ろを走っている複数のモンスターは恐竜のような外見、水色と青の鱗があり鋭い爪を持っている名をギアノスと言う

少し前を走るギアノスに似た外見に一回り大きい体や爪、ギアノス達を束ねるリーダーのような存在らしい　こいつはドスギアノス
今日の依頼はこいつを討伐するのが目的である

マリオ「あいつがそうか、よし追うぞ」

マリオの言葉と共に走り出そうとするが

ファルコン（ん？翼を羽ばたかせる音・・・何処から？）

ファルコンは立ち止まりふと耳についた翼を羽ばたかせる音を聞く

ピカチュウ「どうしたピカ？急に立ち止まって」

ファルコン「見ろ、足元を影がある。それに、羽音も聞こえる・・・
・・・まずい皆伏せろ」

ファルコンの言うとうりに他のメンバーは伏せるすると上空から何かが降ってくる

トカゲのような外見に黄色と青の鱗と甲殻、巨大な翼に爪、強靱で長い尻尾 別名 轟竜 世間ではティガレックスと呼ばれている凶暴な飛竜である

だが現時点でマリオ達はこのものの存在を知らない何故なら依頼書には書かれてなかったからだ

マリオ「な・・・何だこいつは」

ルイージ「ひいひいー#＼?@—&#＊」

マリオはその姿に唖然とし、ルイージは気絶寸前だった

プリン「怖いプリー。こんな奴居るなんて言ってなかったプリー」

プリンもその姿に恐怖を感じピカチュウの背後に泣きながら隠れる

ティガレックス「グオアアアア」

ティガレックスは足元に居たマリオ達を見つけ咆哮する

リンク「ぐあ・・・何て声のでかさだ鼓膜が・・・。」

ピカチュウ「頭が痛いピカー。」

メンバーは余りの五月蠅さに耳を塞ぐ

だが、轟竜は耳を塞ぐメンバーに容赦なく突進攻撃を繰り返し襲ってくる

サムス「まずい、全員奴の左右に」

サムスの言葉に従い全員が左右に回避する

ルイージ「うわー」

だが、ルイージは回避し遅れたため突進に巻き込まれる

マリオ「大丈夫か？ルイージ」

ルイージ「う・・・うんなんとか・・・」

ルイージは幸いかすり傷程度ですんだらしく何とか起き上がる

フォックス「おい、まずいぞ。あいつターンしてこっちに向かって来てる」

フォックスの言う通りティガレックスは突進し暫くするとこちらにターンして再びこちらに向かって来る

マリオ「とりあえず逃げるぞ。俺らの目的はこいつじゃないはずだ」

マリオは言葉を発した後ティガレックスの攻撃を避けながら全員をドスギアノスが逃げていった方にメンバーを誘導する

だがティガレックスはバックステップをした後大きな爪で雪玉を掻き出してこちらに飛ばしてくる

カービィ「皆雪玉が飛んできてるよ。このままじゃ直撃だよ。どうするの!？」

メンバーは雪玉が飛んできたのに気付き慌て避けようとするが、雪玉のスピードが想像以上に速く避けられない距離に近づいていた

ネス（くっ……バットを出す時間が……。）

ネスはバットで雪玉を跳ね返そうと立ち止まるがするが間に合わず直撃寸前だ

ピカチュウ「あ、ネスが」

プリン「まずいプリこのままじゃネスがやられるプリ。」

メンバーはネスを助けに行こうとするが

フォックス「させるかりフレクター」

なんとネスの前にフォックスが立ちはだかりリフレクターで雪玉を反射する

ドガガガカー

ティガレックス「グワーー」

反射した雪玉はティガレックスに全て直撃し一瞬怯む

ファルコン「危なかったな。よし今の内に逃げるぞ」

足の早いファルコン先頭にその場から離れる（プリンは自分の足の遅さを自覚しているのでころがるを使っている）

雪山頂上付近（エリア8）

メンバーはティガレックスから逃げドスギアノスに追い付いていた

リンク「何とか逃げきれましたね」

ルイージ「うん、でもまだあいつ（ドスギアノス）がいるよ」

ルイージの指差す方に先程同様群れで居るギアノス達とそのリーダー

サムス「どうやらまだ私達に気付いてないらしいな」

マリオ「なら先制攻撃だ　ファイアーボール」

ルイージ「よし僕も」

マリオとルイージの先制攻撃に気付きギアノス達は素早くかわす

マリオ「ちっ・・・予想以上に素早いな」

ルイージ「兄さんあぶない」

マリオ「なんのこれしき」

マリオはジャンプをして飛び掛かって来たギアノスを転がって回避する

だがもう一匹が接近し噛みつきを繰り返す

マリオ「くそ、このままじゃ・・・」

マリオは思わず目をつぶる

ネス「PKサンダー」

カービィ「ファイナルカッター」

だが二人が攻撃を繰り返しギアノスは倒れる

マリオ「すまん油断した」

カービィ「危ないなあ僕達が居なかったらマリオ死んでたよ」

ネス「油断しないでよ。それに僕達も居るんだから頼ってよ」

マリオ「ああ、気を付けるよ」

マリオはゆっくり立ち上がりギアノスに向かって行く

その後もマリオ達によりどんどん倒されていく

ピカチュウ「かみなり」

ヨッシー「ヒップドロップ」

ファルコン「ファルコンキック」

リンク「回転斬り」

フォックス「ファイアーフォックス」

それを遠くで見えていたドスギアノスは実力の差が激しすぎる為かギアノス達を見捨て一匹で逃げようとする

プリン「逃がさないプリころがる」

プリンは物凄い勢いで転がりドスギアノスにぶつかる

その衝撃で地面に倒れ込む

サムス「プリン離れろチャージショット」

サムスの放ったチャージショットでドスギアノスは宙に浮く

ドンキー「これで止めたジャイアントパンチ」

ドンキーはジャンプし追い討ちのように強力なパンチを繰り出す

その後ドスギアノスは全く動かなかった

マリオ「やったなこれで城に帰れる」

ネス「僕もう眠いよ」

ヨッシー「僕もです」

もう大半目が潰れた状態だ

それもそのはずだ今現在午前5時30分　もう半分朝なのである

マリオ「よし船まで競争だ。俺が一番だ」

マリオは途端に走り出す

カービィ「待てー一番は僕だ」

ネス「いいや僕だ」

その後を他のメンバーも追いかけるのであった

第7話 雪山でのクエストVS雪山の狩人とまさかの？（後書き）

今回ドスギアノスのクエストに乱入する形でティガレックスが出てきました。が予定ではもう一度登場すると思う。

第8話 密林でのクエストVS大怪鳥&青い狩人 前編（前書き）

今回はDXチームです

第8話 密林でのクエストVS大怪鳥&青い狩人 前編

マリオ達が帰ってきたその昼DXチームは密林に行くことになった。

マスター「今日は密林に行ってもらおう。それとマリオブラザーズとリンクからメッセージだ『クッパ&ガノンドロフへ もし姫に何かしようとしたら命は無いと思え』との事だ」

クッパ「我輩は此処では何も問題を起こさないと貴様と約束したのだ。マスターハンドするわけなからう」

ガノンドロフ「・・・フン」

クッパは一応約束はきちり守るらしいがガノンドロフだけは怪しいげな顔をしながら鼻で笑った

シーク「一応この姿だから僕は大丈夫だよ」

ピーチ「クッパも大丈夫よ。こんな顔してるけど約束は守るから」

ポポ「嘘あの顔で!？」

ピチュー「信じられないでチュ」

子供達はクツパに聞こえない用に話す

マスター「あ、それとピーチちよつと来てくれ」

ピーチ「はいはい♪」

マスターはピーチを連れて何処かに連れていく

四階 乱闘部屋付近

マスターに付いてきたピーチそこにはデデデも居た

デデデ「やっと来たゾイ待ちくたびれたゾイ。で、話とは何ゾイ？」

どうやら随分待ったらしく少し眠そうにしていた

マスター「すまない話と言うのはこれだ」

マスターが指を鳴らすと

上からキノコが一つカービィのような生物が大量に降ってきた

ピーチ「あらキノピオじゃない」

デデデ「ぬお！？ワドルドゥ隊長にワドルディ軍団ではないか」

マスター「そう彼らに君らのサポートをしてもらう」

デデデ 「おーありがたいゾイ」

ピーチ 「ありがとうマスター」

そう言うのと階段を降りていく

ピーチはキノピオガードを覚えた↑ドラクエ風

デデデはワドルディ投げを覚えた↑こちらも

密林 ベースキャンプ付近

マルス 「で、どうします？今日の依頼は2体の討伐らしいですが？」

マルスが冷静な判断が出るのでこの班のリーダーをつとめている

ミユウツー「・・・マリオが言うにはそのドスランポスと言うのと似たのを討伐したらしいが大したことはなかったらしい」

ピチュー「じゃあ僕はそっちを探すでチュ」

ナナ「じゃあ私も」

ポポ「ナナが良いんなら僕も」

ゲーム&ウォッチ「ジャア俺モソッチニ協力スルゾ」

どうやら子供達はそちらのモンスター討伐を目指すらしい

そして子供達はそのまま海岸沿いに歩いて行った

ロイ「じゃあ僕達も行きましょう」

ロイの言葉の後、残りのメンバーは木が生い茂っているジャングルに入っていく

密林 エリア4

子供達は海岸沿いに歩き海を見ながらゆっくり進んでいた

ポポ「うわー凄いな・・・透き通っている。海何て初めて見たよ」

ナナ「私も!」

どうやら二人は登山ばかりしているので海をゆっくり見るのは初めてらしい

ゲーム&ウォッチ「俺モ海ハ初メテダ!!」

そりゃあね二次元だから

ピチュー「僕はあるでチュ!!! ミュウツーと兄ちゃんに連れてきてもらったでチュ」

この中で海を見たことがあるのが多分最年少のピチューだけだった

そんな何気無い会話をしていた子供達。だが数秒後奴が現れることになる

大人メンバー

こちらはジャングルを歩いていたが一向に大怪鳥らしきモンスターは見つからない。それどころか草食のモンスターしか見当たらない

ピーチ「見つからないわねえ・・・早く帰りたいわ。私いつもこの時間お昼寝の時間なのに」

呑気だな・・・流石マイペース姫

ロイ「ミュウツーさんの超能力で何とかありませんか？」

ミュウツー「・・・いくら私でも未開の土地で搜索は時間が掛かる」

どうやら伝説のポケモンであれど未開の土地を調べるのは少し時間が掛かるらしい

その時ふとマルスが何かに気付く

マルス「そう言えばファルコさんが見当たりませんけど・・・何処に行ったんでしょう」

クツパ「あーあの鳥はなあ・・・」

ファルコは何をしていたかと言うと

1時間前

もうDXチームは大怪鳥討伐に向かっていたがファルコは・・・

格納庫

ファルコ「やっぱり俺にはこっちが合ってるぜ」

ファルコはそう言って自分の愛機スカイクローに乗り込む

そうファルコは空から敵を搜索したり攻撃したりするらしい。元々ファルコは白兵戦を嫌い空での戦いを好むそれによりスターフォックスアサルトでも唯一一度も白兵戦に参加しない

場面戻して密林 エリア2

クッパ「と言う訳だ。ほら上見てみる」

クッパに言われ上空を見ると確かにスカイクローが飛んでいた

ファルコ「こちらファルコ現地に到着した。これより大怪鳥の搜索を開始する」

誰に言ったのか分からないがスカイクローを飛来しながら呟いている

マルス「あ、本当だ。じゃあ僕達は・・・」

会話をしようとしたが

ミュウツー「・・・多分奴を見つけた。付いてきてくれ」

どうやら遂に大怪鳥を見つけたらしい

その後を他のメンバーとアーウィンは付いていく

子供サイド エリア3

ナナ「うう・・・」

ナナは苦しんでいる。足に切り傷があるようだ

その目の前には切り傷を与えた敵がいた

見た目は雪山でマリオ達が倒したドスギアノスそっくりだが青くかつ藍色の鱗、オレンジ色の鶏冠、ドスギアノスより足の筋肉がありジャンプ力がありそうだ 現在部下を2匹つれている

奴はドスランポス。ランポス達のリーダーだ

エリア3にやって来たファイターにいきなり不意打ちを喰らわせてきて現在に至る

ポポ「大丈夫？ ナナ？」

大切なパートナーであり友達であるナナを心配する

ナナ「うん大丈夫！！これくらいじゃやられないよ！！！」

ポポの呼び掛けに元気良く答えると立ち上がる

ピチュー「まずはあいつを倒さなきゃいけないでチュ」

ゲーム&ウォッチ「俺モデキルダ頑張ルゾ」

ポポ「よしあいつをやっつけるぞ」

全員「おー（オー）」

全員が掛け声を上げた後ランポス2匹が噛みつきに来る

ポポ&ナナ「行くよ！！ゴムジャンプ！！」

ランポスが噛みつく瞬間ゴムジャンプでジャンプする

ランポス「??:?」

ランポスは見失ったのか辺りを見渡す　しかしランポスの上空に居るため見つかるはずもない言わば盲点だ

ポポ「行くよ」

ナナ「うん」

ポポ&ナナ「急降下ハンマー!！」

二人はハンマーを下に向けそのままランポスに落下する

ランポス「ギィエエエ!？」

ランポスはもろに攻撃が当たり吹っ飛ぶ

ランポスはもう動かなかった

一方ピチューとゲーム&ウォッチは

ピチュー「でんげきでチュウ・・・うう・・・」

ピチューはでんげきを放つがランポスは難なく避けた

しかしピチューは少し苦しんでいる

何故ならピチューはまだ小さい為電気を扱えず電気系統の技を使うと自身がダメージをうけるのだ

ゲーム&ウォッチ「シェフ」

ゲーム&ウォッチはフライパンを取り出しそれを振ると食材が出て来た

辺りに食材が散乱し逃げ場を失ったランポスは少し怯んでしまう

ピチュー「ロケットずつき!!」

ゲーム&ウォッチが時間を稼いでる間後ろでロケットずつきを溜め怯んだ瞬間に突撃した

ランポス「ギャアア!!」

ランポスは突進を喰らい遠くに吹っ飛ぶ

ポポ「やったー!! さあ後はお前だけだ」

子供達全員がドスランポスを睨む

ナナ「この人数じゃ勝てないよ!!」

だがモンスターに言葉は分からない

そして鋭い爪を立てて勢い良くジャンプし飛びかかってきた

ピチュー「そんな攻撃当たらないでチュ!!」

全員が余裕で回避する

ポポ&ナナ「ブリザード!!」

ピチュー「かみなり!!」

ゲーム&ウォッチ「ジャッジ9!!」

それぞれの攻撃をともに喰らいボロボロになり倒れるが何とか起き上がり洞窟に逃げていく

全員「待てー（待てー）!!」

一方 エリア6

ミュウツウの力により大怪鳥の居場所を探ることができたが道中険しい坂道やランポス等の肉食のモンスターを倒しながらだったのでピーチはもうへばっていた

ピーチ「はぁ疲れた。私もう無理少し休ませて」

マルス「しかし一人で休ませるのは危険では？」

シーク「なら僕が様子を見ているよ。弱い敵なら僕一人で十分だし」

ファルコ「その洞窟の様子を見てきたが何やらけたましい化け物の鳴き声が聞こえた。多分大怪鳥だろうな」

ファルコはスカイクローを着陸させハッチを開き状況を伝える

ガノンドロフ「・・・なら行かざる終えんだろう。それと貴様ら俺のお荷物にはなるなよ。もしそうになったら全員あの世に葬ってやる」

珍しく口を開いたと思えばこのセリフである

ロイ「そ・それより早くそいつを倒して帰りましょうよ」

これ以上ガノンドロフが口を開く前に話を逸らすロイ

クッパ「我輩の強さを見せてやる」

そしてピーチとシークを除くメンバーは洞窟に入って行った

第8話 密林でのクエストVS大怪鳥&青い狩人 前編（後書き）

これ以上話をグダグダにするのもあれなんで一旦区切ります。次回大怪鳥との戦闘です

第9話 密林でのクエストVS大怪鳥&青い狩人 後編（前書き）

後編です

第9話 密林でのクエストVS大怪鳥&青い狩人 後編

ピーチとシークを置いて大怪鳥討伐に向かったメンバー達（因みにファルコはスカイクローに乗ったままだと洞窟に入れそうに無かったので外に着陸させてます）

エリア6

洞窟に入ってみると何とも間抜けな顔をしながら吞気に欠伸をしているモンスターが居た

見た目は全体的にピンク色の鱗や甲殻。薄くかつ丈夫そうな青い翼膜。そして何と言っても最も特徴的な黄色い巨大な嘴。そうこの間抜けそうなモンスターが大怪鳥イェンクックである

幸いまだファイター達には気付いて無いらしくあちこちを動き回っている

ファルコ「幸いまだ気付かれて無いらしいな・・・」

マルス「想像以上に大きいですね。間抜けそうですが」

ロイ「言ってる場合ですか！？速く作戦を立てないと」

クツパ「ガッハハあんな間抜けな奴我輩一人で十分だ」

そう言うとな人イャンクツクの方に向かう。そして

クツパ「喰らえクツパブレス！！」

クツパはイャンクツクに近づき足元に炎を吐くが全く効いている様子は無く逆に気付かれてしまった（モンハンを知らない人へイャンクツクは火属性をほとんど受け付けません）

イャンクツク「クワッ??グワアアアアア！！」

クッパだけなら未だしも全員気付かれてしまった

そして獲物を見つけて喜んで居るのか甲高い声を発してこちらを見る。次の瞬間顔の後ろに閉まっていた耳を広げさっきの間抜けさが嘘かのような顔になる

ガノンドロフ「フンッ馬鹿者め」

ロイ「それより早くクッパさんを助けましょう」

ミュウツー「・・・世話の焼ける亀だ」

そう言って全員が大怪鳥の所に向かう

ミュウツー「・・・おい鳥。貴様の光線銃で奴の気を引け」

ファルコ「てめえに言われなくても分かってる・・・って、鳥は言うな!」

突っ込み遅いぞ『そうめん』↑これについてはスマブラXのフォックスの通信にて

ファルコ「チッ、白兵戦は苦手なんだがやむ終えねえな」

そう言って二丁のブラスターを取り出しメンバー1のジャンプ力を生かし空中から大怪鳥を射つ

ファルコ「おら、おら、おら!!」

イヤクック「クワ!? クワッ!?」

素早い動きに攪乱されファルコの方に集中しすぎた故に懐が盲点となっていた

ロイ「足元が隙だらけだよ」

マルス「一気に決めるよ!!」

ロイ&マルス「W^{ダブル}マーベラスコンビネーション!!」

イャンクック「グワー!?!」

突如足元に痛みを感じたイャンクックは翼を広げ後ろに飛びながら後退した。その衝撃で風圧が発生しファイター達は一瞬怯んでしまう

ミュウツー「・・・なんて風圧だ!?!」

クッパ「この程度で吹き飛ばされる我輩では無いわ!!」

だが一瞬の怯み。それはモンスター達にとってはこれとないチャン

スなのだ

イヤンクック「グワー!!」

顔や体を上げたと思えば次の瞬間口から巨大な火炎弾を吐いてきたのだ。一発だけなら未だしも何発も吐いてきたのだ。

マルス「カウンター!!」

ミュウツー「シャドーボール」

ファルコ「リフレクターシュート!!」

それぞれの技を繰り出し火炎弾を相殺させる

ガノンドロフ「こんなもの俺が喰らうか」

だが・・・

ロイ「うわああー!!」

ロイは風圧の影響で怯んだままだった為避けきれずにモロに喰らってふっ飛ぶ

マルス「ロイ!？」

マルスは目の前に敵が居るにも関わらずロイの元に向かって行ってしまったのだ

それを大怪鳥が見逃さず突進を繰り返してきたのだ

マルス「不味い避けきれない!!」

ロイを抱えたまま立ち尽くしているマルス。自分も終わったかと確信したとき

ピーチ「キノピオガード!!」

なんとピーチが前に立ち懷からキノピオを出す。すると攻撃が全てイヤンクツクに返される

イヤンクツク「グワァァー!?!」

相当効いたのか怯んだ後その場で跳ね。その後口から炎を漏らしながら再びこちらを見つめる

これがモンスターが危険に陥った時に起こす『怒り状態である』

マルス「助かりました。あ、それよりロイが・・・」

ロイ「うう・・・」

至る所に火傷を負ったロイは腕を抑えながら苦しむ

ピーチ「じゃあ私が此処から離れた所まで避難させるわ」

マルス「宜しくお願いします」

その後背中にロイを背負わせさつき居たエリアに走っていく

その後標的を変えクツパを食らおうと啄んで来た

クツパ「ガハハハ馬鹿め！！貴様は我輩の甲羅の餌食になつとけ
！！」

そう言うと甲羅の中に潜りイェンクツクはそのまま刺付きの固い甲羅を啄んでしまった

イヤンクツク「グワアア―?!」

刺が巨大な嘴に刺さり血が吹き出す。終いには数本の刺が顔を貫通し自慢の嘴がボロボロになる

さらに悪いことに深く刺さりすぎて抜けなくなってしまったのだ

ガノンドロフ「フンッ。^{クツパ}貴様もたまには役に立つんだな。ハアア―
魔神拳!!」

ガノンドロフはクツパの甲羅の上に乗りながら顔面に強力な一撃を加える

その衝撃で巨大な耳まで壊れてしまった

イヤンクツク「グワアアア―!!」

かなりご立腹らしく足を器用に使い顔に刺さったクツパ（実際には甲羅の刺）を抜きクツパを蹴り飛ばす

そして倒れたクツパを足で踏み潰そうとした時

ザクッ

何かが首に刺さっていた

それを確認する間も無く悶える大怪鳥

そしてイヤンクツクの背中に乗っていたのは

シーク「危なかったね。全くヒヤヒヤさせるよ」

シークだ。彼はイヤンクツクの首に正確に針を投げつけたのだ

イヤンクツク「グワアァー・・・」

どうやら首にある発声気管を刺され上手く鳴き声が出せなくなっていた

ミュウツー「・・・どうやら止めをさせそうだな」

そう言うときシャドーボールを溜め始める

マルス「じゃあ僕も」

マルスも剣を後ろに引き平行に構える

ミュウツー「シャドーボール!!」

マルス「シールドブレイカー!!」

2つの技が炸裂しその後イヤクツクは倒れこみそのまま動かなかった

マルス「何とか勝ちましたね・・・」

ファルコ「こんな化け物がこの島中に居るのかよ・・・」

シーク「そう考えると恐ろしいもんだね」

クツパ「おい向こうから声が聞こえるぞ」

そう言われたので耳を傾けると確かに声が聞こえた。何かと思いい声の方に向かおうとすると

ポポ「うわ！？ビックリした・・・」

ピチュー「モンスターがいたかと思ったでチュウ」

そう子供達だったのだ。何故居るかと言うと

10分前

ポポ達は逃走したドスランポスを追って洞窟の中に入っていた

ナナ「やつと追い詰めたよ!!」

ピチュー「観念するでチュウ!!」

そう言って睨みをきかす子供達。観念したのかドスランポスも子供達を睨み付ける

ゲーム&ウォッチ「ふぁいあー!!」

まずゲーム&ウォッチは救助人のような平面人間が持ったスプリング(?)に乗りジャンプする

ゲーム&ウォッチ「喰ラエ!!どんきーこんぐ・Jr」

そのまま大きな鍵を持ち急降下するがドスランポスは余裕を持って回避する。そしてそのままジャンプ攻撃を繰り出す

ゲーム&ウォッチ「ウワアアア!!」

鍵を抜く一瞬の間に攻撃を繰り出された為無抵抗のまま喰らいふっ飛ぶ

ポポ&ナナ「アイスショット!!」

氷を出し木槌で打ち地面を滑らせる

ドスランポス「グエエエ!?!」

着地隙を狙われ直撃し吹き飛ばされる

ピチュー「止めでチュウ!! かみなり!!」

倒れているところにモロに喰らってそのまま動かなくなる

ポポ「やったー!!」

ナナ「大丈夫? ゲーム&ウォッチ?」

ゲーム&ウォッチ「俺ハ大丈夫ダ!!」

ゆっくりと起き上がるゲーム&ウォッチ

ピチュー「それより向こうに何か有りそうでチュウ」

ピチューは入って来た場所とは反対の方を指差す

ポポ「面白そう!!行ってみよ」

全員「おおー!!」

ポポ「と言うこと」

マルス「なるほど・・・じゃあ今日の依頼は達成ですね。」

ピチュー「僕もう眠いでチュウ・・・」

ファルコ「じゃあ先に帰らせてもらうぜ!!」

ファルコはスカイクローに乗り先に帰るらしい

シーク「じゃあ僕らも帰ろう」

そう言ってイヤンクツクの死骸を残し洞窟から出てき、ロイとピーチと合流して帰って行った

第9話 密林でのクエストVS大怪鳥&青い狩人 後編（後書き）

次回はXメンバーin砂漠を予定しています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2591s/>

スマッシュハンターブラザーズ

2011年11月13日08時17分発行